

清水泰先生略歴並著書（「立命館文学」第一七〇・一七一号より抄出）

- 一、明治二十七年一月二十八日出生
- 一、大正十四年三月 京都帝国大学文学部文学科卒業
- 一、同 四月 立命館大学予科講師
- 一、昭和三年 四月 立命館大学予科教授兼専門学部講師
- 一、昭和十六年四月 立命館大学教授
- 一、昭和三十一年四月 立命館大学専任講師
- 一、昭和三十四年三月 定年退職
- 一、同 六月 立命館大学名誉教授

|           |        |            |
|-----------|--------|------------|
| 註異本堤中納言物語 | 国文学会   | （昭和三年四月）   |
| 堤中納言物語評釈  | 文献書院   | （昭和四年九月）   |
| 校註方丈記     | 平野書店   | （昭和七年二月）   |
| 訂堤中納言物語評釈 | 立命館出版部 | （昭和九年六月）   |
| 保元物語太平記選釈 | 日本文学社  | （昭和十年十一月）  |
| 平安朝物語選    | 白帝社    | （昭和十一年一月）  |
| 堤中納言物語    | 白帝社    | （昭和十二年十二月） |
| 堤中納言物語詳解  | 要書房    | （昭和二十九年六月） |
| 堤中納言物語    | 弘文堂    | （昭和三十年五月）  |

「慘風  
悲雨」世路日記」試論

和田 繁 二 郎

菊亭香水の「<sup>慘風</sup>世路日記」（明治十七年刊）については、神代種亮・柳田泉・本間久雄の諸氏が詳述し、またその意義について述べておられる。しかし、多くの文学史のなかに、この「世路日記」に触れたものは、極めて乏しく、篠田太郎氏の「<sup>唯物語史観より細たる</sup>近代日本文学史」、吉田精一氏の「明治大正文学史」、岡崎義恵氏編の「明治文学史・文芸編」等を数えるにすぎない。

神代氏は「明治文学名著全集・世路日記」（大正十五年刊）の解題で次のように言う。

「世路日記」は菊亭香水の仮号を以て佐藤蔵太郎の著作せる小説にして、「小説神髓」以前に於ける新様の作品なり。其の、所謂戯作より一步を進めたる点に於いて、又政治小説の先驅をなせる点に於いて、文学史上に一地位を占むべきものなり。発行部数より言はば、明治初期の小説中、恐らくは其の右に出づるもの無からむ歟。

ここに言う「新様の作品」の内容は、「戯作より一步を進めた」とこと、「政治小説の先驅をなす」とことの二者である。この後者の「政治小説の先驅をなす」という点について、柳田泉氏は、その著

「政治小説研究」において、

「<sup>慘風</sup>世路日記」の今本は、政治小説として見れば見らるるものであるが、著作の初めに於いては、これに政治的意図を寓するつもりは何等無かつたのである。「世路日記」は中途で改題した題名であって、その初名を「<sup>月水</sup>奇譚艶才春話」といふ。これの執筆は明治十一年の由であるが云々

と言っている。この「艶才春話」は上篇（十四回）は明治十五年四月、中篇（十回）は明治十五年七月に出版されたもので、下篇はこれより二年の後の出版である。これは著者の多忙のため執筆が遅れたのであって、十七年四月、上中下の三篇を合冊刊行することになったのだが、ここで題名を改め「<sup>慘風</sup>世路日記」としたのである。

柳田氏の言う「初めに於いて」とは、この上中篇、すなわち「艶才春話」の部分について言っているのである。

ここで簡単に梗概に触れておこう。

青年教師久松菊雄は教え子の松江タケと将来を誓う仲となる。同町の非行少年安井策太はかねてタケに思いを寄せていたが、久松との仲を知って、町のボスに働きかけ菊雄を避地の学校へ転任

させてしまふ。一方タケの継母は菊雄を遠ざけ、タケを親類へ嫁入させる。菊雄は教員社会に見切りをつけ、一層の向上を目指して大阪に遊学する。一方タケは嫁したものの、常に菊雄を思い、夫に仕えないので、夫の怒りを買ひ、一日実家へ戻ってくる。継母は怒って雪の中へ突き出す。タケは自殺をはかる。(以上が上中篇)

タケは彼女等の媒妁人江崎某に救われ、その家にかくまわれる。一方菊雄は大阪で結城松雄、勝間田早苗の良友を得、益々勉学につとめる。菊雄は著書を出すにあたって、出資者を求め秋田某氏に遭う。秋田の娘千代子は菊雄にはげしく恋慕する。秋田は菊雄の人品を愛し、二人を結婚させようとするが、菊雄は父危篤の報に接して帰国する。父の死後、郊外を散策中、タケに遭う。タケの結婚は名儀のみの結婚で、まだ操をたてていることを知り、六年ぶりで二人は結婚する。その後、菊雄は、結城とともに東上し、政治運動に従う。(以上下篇)

このように、上中篇では、特に政治的な意識は出てこない。菊雄が教員を辞し、大阪へ出る際にも、「久松菊雄ハ一タビタケト別レテヨリ爾后鬱々トシテ毫モ楽ム所アラサリシカ漸クニシテ以テラク鳴呼蛟龍モ時ヲ得スシテ蚯蚓ト巢窠ヲ同フセハ蟻蟻ノ為メニ苦シメラルト余今少シク為メニスル所アツテ以テ姑ク此卑職ヲ奉スレハコソ亦今日ノ如ク心ニアラサルノ卑屈ヲモ作ス可ケレ何ソ止テ長ク此鄙事ニ従フ可キ者ナランヤ若カス速ニ此任ヲ解テ以テ自主独立ノ基ヲ謀ランニハト独リ奮焉トシテ此ニ一志ヲ決シ断然職ヲ致シ校ヲ退キ遂ニ笈ヲ負ヒ父母ヲ辞シ一身郷関ヲ背ニシテ而シテ出ツ」とある。

い。

ただこの結末へのストーリーを必然と見、民間の一般知識人が政治的意識に目覚めたという記述を重視するならば、当時の政治小説、すなわち、外国の情勢をかりて示唆するもの(「経国美談」一十六・十七年一等)、寓意を以て政界を諷刺したもの(「阿国民造自由廻錦袍」一十四・十六年一等等)、自由民権思想宣伝の具にすぎないもの(「自由艶舌女文章」一十七年一等等)などから見れば、「雪中梅」以後の写実的な政治小説の先駆をなすということは言い得るかもしれないが、やはり「雪中梅」あたりと比較すると、政治的意識ないしは素材が、著しく微弱で附説的であり、元々これを政治小説だと称するのが無理だとするのが妥当なようである。(明治二十八年刊の訂正増補版は、政治活動の部分が書き加えられており、これは政治小説と称してもよい。)

次に神代氏の言う「所謂戯作より一步を進めたる点」であるが、これはたしかに認め得るとしななければならない。右の通り「世路日記」には政治的な素材や意識は微弱であるが、他の社会批判や文明批評はかなり顕著である。なかでも教育界の腐敗を突く言葉は熾烈である。主人公久松菊雄が転勤の辞令を受けた時の慷慨であるが、

固本県ノ学務課員ニ、能ク人材ヲ観察シテ以テ之ヲ登用スルノ識見ニ富ル者アルコトナク亦タ彼ノ巡回教師ノ如キ学区取締ノ如キ多クハ是レ愛憎ニ因テ事ヲ行ヒ私闘ヲ受ケテ務ヲ弁スルモノ少シトセズ現ニ余カ知ル所ノ村井氏ノ如キハ才学共ニ兼備シテ加フルニ能ク意ヲ学事ニ注キ同校ノ進歩較観ル可キモノ少キニ非ラスト雖モ憫ム可シ更ニ一等ヲ進タルコトナク之ニ反シテ彼ノ滝某ノ

このようにただ「自主独立ノ基ヲ謀ラン」とあるばかりで、ことさらに政治運動を意味するものはないのである。

また、既に柳田氏も指摘されている通り、「艶才春話」の題名よりも予想されるように、これは「奇事花柳春話」(丹羽純一郎訳・明治十一年)の影響を多分に受けており、その点、仲を隔てられた男女が、積年の後、相結ばれるところに重点を置いたものとしなければならぬ。

これが政治的色彩を帯びるのは、ようやく下篇の巻末においてのみである。それは菊雄とタケの結婚後のことで、あたかもつけたしの感さえあるものである。すなわち、

時正ニ明治十四年十一月初旬ニシテ世ハ恰モ明治二十三年ヲ期シテ国会ヲ開設スヘシトノ大詔アリタル時ニ際シ挙国ノ人心大ニ奮起シテ苟モ志ヲ国事ニ懷ク者ハ皆ナ争フテ四方ニ奔走シ有志ヲ集メテ人心團結ノ事ヲ謀ラサルハナシ時ニ会々(中略)友人結城松雄ノ訪ヒ来タルアリテ留マルコト数日共ニ国事ヲ論シ当世ヲ談シシカ今ヤ男兒タル者ノ安シテ僻隅ニ逸居シ在ル可キノ秋ニアランヤト互ニ主義ヲ共ニシ目的ヲ同フシテ大ニ改進自由ノ説ヲ主張シ翌十五年歳始ニ及ヒ二人共ニ再ヒ故郷ヲ後ニシテ東京ニ来リ今ヤ現ニ某政党ニ加盟シ演説ニ文壇ニ専ラ彼ノ改進自由ノ説ヲ主張シ居ルト云フ

といっている。まずこのような附説的なところにのみ政治小説らしさが見られるにすぎず、そこに時代の推移とともに、作者の政治的開眼が行われたとは認め得るものの、この作をもって政治小説と見、また政治小説の先駆と見ることはいささか過言だと言わねばならぬ。

如キハ浅学不才一章ノ文辞スラ容易ニ之ヲ綴リ得ル能ハス只其長スル所ノモノハ輕弁ト誤笑トノミ然レトモ彼レ既ニ彼ノ高等ニ在リ(中略)実ニ長大息ノ至リニ堪ヘンヤ(第五回)

任ヲ学務ニ奉スルノ官吏等タルヤ概ネ其知識ニ富メル者アラシテ以テ教育ノ事毫モ其真理ヲ解スル能ハス(中略)是ヲ以テ教課ノ設ケ甚タ其宜シキヲ失スルモノ多ク教員ノ黽陟大ニ其当ヲ誤ルモノ少シトセス(中略)生徒ノ學術之ヲ實際ニ知ルニアラス教員ノ勤怠之ヲ實際ニ知ルニアラスシテ以テ只彼浅学不識ナル巡回教師カ待遇ノ厚薄ニ因テ到ル処毀譽ヲ恣マ、ニシタル一冊ノ巡回日誌ト無知頑愚ナル学区取締カ愛憎賄賂ニ由テ以テ己レカ私偏ヲ逞フセル一片ノ上申書トニ由テ以テ之レカ褒貶黜陟ヲ為シ之レカ改正変更ヲ決行セルヲ以テ其實際ヲ誤リ其至当ヲ失フ少ナカラサルモ又怪シムニ足ラサルナリ(第二十三回)

また菊雄が「社会道德篇」という著書を公刊する際、そのパトロンとなった富豪に洩す言葉がある。それは、社会道德の腐敗、出版道義の低下を衝いている。

今ヤ社会ノ風習全ク浮躁輕薄ノ極度ニ達シ義氣人情ノ如キハ更ラニ之ヲ言フ者ナク只己カ力ヲ求ムルニ汲々トシテ毫モ恥ヲ知ルコトナキヨリ徒ラニ有害無効ノ著書ヲナシ江湖幾万ノ子弟ヲ惑ハスモノ尠ナカラス此ヲ以テ當時新タニ発兌スルノ著書ハ汗牛充棟モ當ナラサルカ如シト雖トモ其世益ヲ為スノ書籍ニ至リテハ実ニ寥寥々曉星ヲ見ルカ如シ(第三十回)

その他、特に都会人士の社会道德の頹廢を嘆いたところ(第三十五

回)や「固ヨリ威柄ヲ以テ庄ス可ラス権勢ヲ以テ服スヘカサルモ  
ノハ男女婚姻ノ一事ナリ」(第十二回)と言って、当事者の意志を考  
慮せず、親の権威で結婚の相手を決定する弊習をきびしく衛いてい  
るところや、あるいは、その婚姻の相手として、書生が軽蔑される  
べき存在ではなく、将来性ある人々として注目されると説いている  
ところ(第二十八回)もあり、多くの新しい思想を盛っていること  
が注目される。まずこれらの思想の新しいさに、この「世路日記」が  
従来の戯作をひきはなすという点を認めることができよう。

しかし、この作品の真の新しいさは、ただ文学以前の思想にのみあ  
るとは言えない。柳田泉氏は前掲書において、「世路日記」はその  
初刊の当時に於いて既に大に青年社会の愛読するところとなり、数  
版を重ねたといふ」が様々の「思想的分子によって当時の人々がさ  
う甚しく感動したとは考へられない」と言い、「少年少女が環境と  
伝統の束縛、家族制度の圧制等から脱して希望の多い若々しい新社  
会を形作らうとする努力、いはば此二人の求める感情的解放、そこ  
に著者自身の要求の発露があり、当時の多数青年の共鳴があったの  
ではないか。」と言う。たしかにこの男女の行動のもつ未来性は、  
若い人々にアッピールしたことはたしかであろうと思う。それに、  
それを支える文章、表現が堅い漢文調であるにも関わらず、むしろ  
それ故に小説としては新鮮であり、極めて抒情的である点、効果の  
あったことも十分肯けることである。

このような、若い男女の行動の未来性、ロマン性はたしかに戯作  
をひきはなすものである。しかし、このような新しさを真に将来さ  
せたものは何であつたか、それこそが、この作品の新しさの実体で

ニ媚ビズ、拳ヲトシテ務メ、汲々トシテ懈ラズ、当時同校ノ規律  
整然見ル可キモノ多カリシハ、一ニ鶴谷ノ力ニ依リシナリ、サレ  
ド由來頑雲ハ月ヲ掩ヒ、狂風ハ花ヲ散ラス、教員中二三奸佞ノ徒  
鶴谷ノ声譽ト名望トヲ媚嫉シ、竊ニ之ヲ傷ケ之ヲ貶セント図ル者  
アリ、是ヲ以テ其ノ方正ハ頑冥人情ノ何タルヲ解セズトセラレ、  
其ノ謹直ハ過嚴子弟ヲ教フルノ道ニ違ヘリトセラル、鶴谷之ヲ聞  
クヤ憤然筆ヲ執テ一小史ヲ起草シ艶才春話ノ題名ヲ以テ、之ヲ豊  
前中津ニ於テ刊行スル田舎新聞ニ投ズ、(中略)鶴谷ノ該小史  
ヲ起草スルヤ、一面ニハ当時教員社会ノ風紀弛緩シ、苟安小康ニ  
甘ンジテ毫モ青雲ノ志ナキヲ諷シ、他ノ一面ニハ頑冥人情ヲ解セ  
ズト諷ル者ヲ反省セシメンガ為メ纏綿濃厚ノ情致ヲ序シタルモノ  
ナリ(柳田泉氏「政治小説研究」による)

ここに記されている自讃めいた一条は、信じないとしても、同僚  
に中傷され貶されたこと、その結果僻地に転任を命じられたこと、  
それに対して「憤然筆ヲ執」ったことは信じてよいと思う。そこに  
まず、作者の自然発生的な問題意識と表現衝動を見出すことができ  
る。すなわち、自己を確認し、自己を主張しようとする情熱がその  
背骨を貫いているのである。言いかえれば作者の主体性が確立され  
ているといつてよい。そして自己を主張するとともに、自己の対立  
者となった教員社会を批判し、否定しているのである。更にまた、  
新しい男女の結合の有り方を説いているのである。もっとも、そこ  
にはすでに柳田氏も指摘されているように、ストーリーにおける偶  
然性や、人物における類型性に、著しい戯作性をのぞかせている。  
にもかかわらず、「世路日記」一巻の新しさは、当時の戯作と全く

あらねばならない。それは作者の主体的な人間の確立にあったので  
はないか。それはいわば近代的な人間の確立に通じるもののだとい  
つてもよいであろう。

当時の戯作における、作者と作品との関係はどのような形であつ  
たか。明治戯作の中心に位するのは「つづきもの」の発展した毒婦  
物、白浪物などであるが、そこにおいては作者は単に職人としてそ  
れを書かされたにすぎないのである。例えば、高橋阿伝が処刑され  
たとなると、魯文が書き起泉が書く、それは決して作者の主体的な  
問題意識や、表現衝動によつたものではない。書肆の命ずるところ  
に従い、また読者の嗜好を体しての述作なのである。また一面、こ  
との事実であるかないかは、多く問うところではなかった。「高橋  
阿伝夜刃譚」と「東京奇聞」を読みくらべて見るならば、そこに如  
何に相違するところが見られるか。お伝の出生、母の素性からして  
両者は大きく喰違っているのである。この真実を無視し、筋の展  
開の中でスリルとサスペンスを盛り、シチュエーションの一つ一つ  
に惨忍・猥雑をのぞかせ、またこれらの陰微の陰に、ちよびり勧  
善懲惡の詞を付加する。報道性に期待される唯一の近代性もこれら  
の戯作のなかには見出すことが困難である。それはすべて作家とし  
ての主体性の喪失に由来している。

「世路日記」執筆の動機については、香水の自叙伝「文士佐藤鶴  
谷伝」に次のように記されている。

明治十二年三月塩屋学校ニ転動ヲ命ゼラル、是ヨリ先鶴谷、鶴  
谷女学校ニ奉職スルモノ前後五年、方正謹直ヲ以テ称セラレ、職  
ニ当ルヤ懇切子弟ヲ教ヘ、精励校務ヲ執リ、権勢ニアラズ、富貴

次元を異にする新しさを示し得た。それは何ゆえか。それこそ作者  
の主体性の確立にあつたと言わねばならない。

なお、右の制作の動機を物語る「鶴谷伝」のなかに、作者を頑冥  
とし人情を解しないと見るそしりに報いるために「纏綿濃厚ノ情致  
ヲ序シタルモノナリ」とあるが、これと彼の内面的な真実とはどの  
ように相関するのであろうか。一見、自己の内面にはないものを、  
ことさらに描き出したと疑われる。右の自伝に「著者自己ノ経歴ヲ  
序スルモノニ非ズ」と書いており、彼の体験にはなかったものと信  
じてよいと思うが、はたして体験にはなかったとしても、内面に貯  
えられていたとすることができないであろうか。やはりそれは必ず  
しも彼にとって虚偽ではなく、作者の内面に存在したものと見るべ  
きであろう。既に見てきた作中の結婚観の示すように、作者の内面  
には、菊雄とタケとをめぐるロマンが、肯定され醸成されつつあつ  
たと見られるのである。従つてそれは、やはり作者の内面的な真実  
と一致し、また、その主体性に参調するものであつたと見られる。

翻つて考えればこのような、自我の確認と主張は、当時の政治小  
説のなかにも見出すことができるであろう。しかし、彼らは自己の  
生活体験の具象とその全体をあげて、その行動のなから文学的表  
現を行うよりも、政治的・思想的に啓発されたところに醸成された  
情熱のもつ、抽象性を多分に持つものであつた。従つてそれらは、  
国内の民衆や政治家の活動に即するよりも、外国に素材を求め、あ  
るいは、間接的な寓話的発想をとらざるを得なかったのである。そ  
の点、「世路日記」の現実性とそれを支える主体性は高くなつてい  
よいと思う。

もつとも「世路日記」も「花柳春話」という文学的先蹤をもっている。従つて全く自己の内面にのみ真実であつたとし難いかもしれないが、それはただそれを模倣し、翻案するに止つたものではなく、「花柳春話」のロマン性を十分に彼のものとする事ができたところの、彼自身のものを見出す事ができよう。そこに、当時多くの読者を動員することも可能であつたとしなければならぬ。

以上のように「世路日記」における文学的主体性は、当時においては極めて貴重なものであり、そこにすでに近代的な文学性の足跡を認めうるものがあり、文学史上、逸することのできない作品であると思う。

(五九・八・八)

(注) この小論の結論における評価が、従来の評価と異なることを明かにするため、念のため、冒頭にあげた先学の言を抄出する。

本間久雄氏「明治文学史・上巻」二七九—二八二ページ。「……純粹の政治小説と少々趣を異にするが、菊亭香水の『（悲風）世路日記』……をも序でに併せ述べて置かう。……その頃の教育社会の風紀が振はず弊癘しきりに生じ、且つ教育界に身を置く者として、志の遠大を期する者が極めて稀であるのを慨して「諷刺激励、頑を匡し、儒を起さん」ために、その作を公けにしたのであり、……政治小説といふよりは、寧ろ教育小説、立志小説といふべきものである。しかし、此作は……教育事業を、……男子一生の事業とするに足りないものと考へ……当時の政治熱が、いかに青年有為の教育者をして、其職に留らしめず、更に彼れを駆つて、政治社会に赴かざるを得ざらしめたかといふ一代の風潮をも併せ窺ひ得るものであり、その意味で、この作は一種の政治小説と云へな

いことはない。……」

篠田太郎氏「史的唯物論 近代日本文学史」一〇四ページ。「これらの政治小説以外に一般文士の政治小説がある。……菊亭香水の『（悲風）世路日記』は政治小説とは云へないもので政治も政界も描かれてゐず……最後に主人公が志を国事に懷いて政界に活躍することを附け足してあることが政治に関係あるだけで、一種新様の小説と云ふにすぎない。……戯作の影響とは全く離れてゐると共に、文士の政治小説（政治家のそれには非ず）に形態上の先驅をなしてゐる点は認めらるべきであらう。……」

吉田精一氏「明治大正文学史」二二二ページ。「花柳春話の影響は著しいものがあり、その模倣作……が続出したが、その内で挙げるべき佳作は菊亭香水の『世路日記』である。小学校の教員……が、志を立てて郷閭を出で苦学力行するといふ、明治初期らしい主題を単純な筋立てでまとめたもので、作も構想も幼稚であるが、ただ全篇を通じて掬すべき情味があふれ、甘美な感傷が香高く匂つてゐる。……」

「明治文化史・文芸篇」一一七ページ（岡崎正氏担当の部分）「……政治小説発展時代において、政党を超越して政治小説を書いた人もいる。菊亭香水はその一人で、その著『（悲風）世路日記』は教育の振興を説いたもので、一種の政治小説といえるであらう。これは一八八四年（明治十七年）に『（悲風）世路日記』と改題され、新文体と新思想の先驅的作品となり、三十年前後にかけて、文学青年の第一に愛読する書の一つとなつたという。」

## 仮名草子瑣言

この稿は、本年七月十三日本学の夏季講座で『「好色一代男」まで』と題して、しゃべりました草稿です。そんな話相応の逸脱もあつて、平生の饒舌を更に甚だしくした嫌ひはありますが、文学の論文は、自然科学風の平板退屈な記述とは違ふ、といふ持論の遁辞にすがつて、稿を改める労を厭ひました。加へて、別稿の『「好色一代男」私記』（「立命館文学」昭和三十四年七八月合併号）と、この稿の性質上、重なる記述がありますことも、あらかじめ御見許しを願つておきます。

転換期の文学といふテーマの下で、私には中世から近世への変りめについて話せといふことなのですが、こゝは実は、大変なところと思つてをります。それについては、今改めて申しますのも気のひけるくらい、年々の文学史の講義で繰り返してあるところですが、この国の文学史を大きく分けて、前半貴族文学の時代後半庶民文学の時代と区分する、その境目がそこにあると思ふからです。

近ごろ、日本史の方では、鎌倉室町江戸の三時代を一括して中世と呼ぶ風があります。その封建時代といふ一括の仕方は、歴史学の

方では当然で、むしろ、遅きに過ぎた感がありますが、それを文学史の方にもちこむ人のありますのは、いかがなものでせう。文学史では、封建時代といふ概括に一義の意味があるかどうかの、反省が必要です。

仮りに、その時代の作者や作品を漫然と思ひ浮かべてみても、鎌倉室町時代なら、定家、兼好、世阿弥、心敬、宗祇等々の人々にしても、平家物語以下の軍記物の如きにも、私どもがすぐ強く感じるのは、封建制でなく、むしろ、貴族文学、その亜流、隠者文学のにほひちやありませんか。江戸時代の作者についても、西鶴、芭蕉、近松から種彦、春水の徒に至るまで、数へ立てて、庶民文学の先驅、町人文学の感が深いちやありませんか。一寸注意しておきますが、町人といふのは家持階級のこと、その下に借家人階級があるので、す。やかましく言へば、享受者の層は時代の下るにつれて、借家人階級にも厚くなり、文字を必要としない芸能ははじめから借家人階級の参加も相当に見られますが、中心は、町人階級で、文学は、まだ完全に庶民のものとなつたとは言へぬのです。

さて、この一寸した注意の前にかへつて、鎌倉室町時代やら江戸

村 田 穆